桑山河

第17号

平成16年5月20日
発　行
社団法人 沼津牧水会

目　次

「いのち」の歌　2
第1回 沼津文学祭　8
沼津ゆかりの
短歌・俳句展　10
富士山を望む
牧水歌碑めぐり　12
第50回 沼津牧水祭
碑前祭・芝酒盛　18
短歌大会　19
第16回 雛の歌会　20
文化講座　21
サロン音楽の夕べ　22
平成15年度事業報告　23
定款・編集後記　24

「いのち」の歌

伊藤一彦

中西進氏の『ひらがなでよめばわかる日本語のふしぎ』（小学館）は、日本人のそもそもの心を知るために「やまとことば」を奥深く探った興味深い本である。「やまとことば」とは簡単に言えば訓読みの言葉である。たとえば「め」と言えば、動物の「目」も意味するし、植物の「芽」も意味する。漢字で見ればまったく別の言葉に思えるが、「やまとことば」では同じ「め」である。そこで、中西氏は言う。「目」も「芽」も外界を認識する働きは共通であると。なるほど土から出た芽はこの世界を見まわしながら様子を探っているようだ。

さて、「いのち」と「いきる」という言葉について、中西氏は次のように書いている。

「いのち」にも「いきる」にも、そして「いき（息）」にも共通する「い」の存在が気になります。ほかに「い」が語頭にくることばをいろいろと探してみると、「いむ（忌む）」、「いつく（斎く）」や、立派な樫をいう「いつかし（厳樫）」、神聖な杭をいう「いぐい（斎杭）」などが並びます。「いむ（忌む）」は慎んで穢れを避けること、「いつく（斎く）」は神聖なものを大切に祀ること、そして「いのる（祈る）」は「斎宣る」で、神仏にこいねがうことです。

このように、「い」の音で始まることばは、どれも厳かなものだとわかります。「いのち」も「忌（斎）の霊」と書くほうが、本来の意味にふさわしいでしょう。

私たちが日ごろ何げなく使っている「いのち」という言葉のもともとの意味を教えられ考えさせられる。そして「いのち」という言葉を一音一音ゆっくりと大切に発音したくなる。『万葉集』にはこの「いのち」の語の使われた和歌が七十六首ある。万葉仮名で「命」「壽」「齢」「伊乃知」「伊能知」と書かれているが。

明治以降の近代の歌人は「いのち」の語をどれくらい使っているだろうか。じつは「いのち」の語を最も多用した歌人が若山牧水だった。牧水の「いのち」の歌をこれから引きたいと思うが、その前に同年代の歌人の「いのち」の語の歌を見てみよう。

前田夕暮は、若山牧水が『別離』を出版した年に『収穫』を出版し、二人して自然主義歌人としてデビューした歌人である。その『収穫』は五四一首を収めており、その中で「いのち」の語の使われた歌が二首ある。

あたたかき血潮のなかにながれたる命恋しき日となりにけり

はてしなくかかるおもひの君にのみたぐられをらば命死ぬべし

「君」に対する思いの深まりの中で「命」の言葉が使われている。一首目には「あたたかき血潮のなかにながれたる命」の表現がある。

前田夕暮（秦野市立図書館提供）

前記の中西進氏の本によれば、「いのち」の「ち」は「血」「乳」にも通じ、霊格を表わす言葉という。「おろち(大蛇)」の「ち」、「いかづち(雷)」の「ち」も同じように考えることができるとのことである。夕暮作品の一首目のこの「血潮のなかにながれたる命」はまさに「斎の霊」を感じさせる。

北原白秋（北原白秋生家・記念館提供）

桐の花（北原白秋生家・記念館提供）

つづいて牧水と早稲田で同級生だった北原白秋の場合を見てみよう。大正二年に出版された白秋の第一歌集『桐の花』は四四九首を収めており、「いのち」の語の使われた歌は三首である。

空いろのつゆのいのちのそれとなく消なましものをロベリヤのさく

哀しくも君に思はれこの惜しくきよきいのちを投げやりにする

夕されば火のつくごとく君恋し命いとほしあきらめられず

三首とも恋に関わる作である。ただし、一首目は「白き露台」の中にあり、二首目と三首目は監獄に入ることになった人妻との恋を歌う「哀傷篇」の中にある。恋の思い出をロベリアの花に託した一首目の「つゆのいのち」の言い方は『万葉集』の時代からある。「ありさりて後も逢はむと思へこそ露の伊乃知も継ぎつつ渡れ」（巻一七・三九三三）などである。露のようにはかない「いのち」も後々逢いたいと思うから生き続けているという歌だ。「哀傷篇」の二首は「惜しくきよきいのち」「命いとほし」と恋する自らを深くいとおしんでいる。古くから恋は「いのち」を実感させるものだった。

牧水とほぼ同年で親交のあった石川啄木の場合はどうか。まずは『悲しき玩具』巻末の「一利己主義者と友人との対話」の有名な一節を引こう。

さうさ。一生に二度とは帰つて来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。たゞ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらない歌が一番便利なのだ。実際便利だからね。歌といふ詩形を持つてるといふことは、我我日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。（間）おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。

啄木は「いのち」とひらがなで書いて傍点を打ち「おれはいのちを愛するから歌を作る」と言っている。『一握の砂』『悲しき玩具』の両方の歌集とも確かにその「いのちを愛する歌」に満ちている。だが、「いのち」の語そのものを使用した歌は二首しかない。

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

そんならば生命が欲しくないのかと、
医者に言はれて、
だまりし心！

悲しき玩具（石川啄木記念館提供）

一握の砂（石川啄木記念館提供）

石川啄木（石川啄木記念館提供）

一首目の方は『一握の砂』、二首目の方は『悲しき玩具』の作。一首目は歌集巻頭の「我を愛する歌」の初めの方にある。この「我を愛する」の表題は「いのちを愛する」の意であろう。自らが「いのち」をひたすら求め愛しているから「いのちなき砂のかなしさ」がしみじみと感じられている。二首目の特色は「生命（いのち）」と表記されていることである。前田夕暮にも北原白秋にもなかった表記である。この歌は明治四十四年二月一日に東大病院で診察を受け慢性腹膜炎と診断された時の歌である。この時の医者とのやりとりは宮崎郁雨宛ての手紙（明治44年2月2日付）に詳しく書かれている。この手紙を引きながら立川昭二氏は『いのちの文化史』（新潮選書）で次のように書いている。

この歌は、医者の独善的で威圧的な態度に対する患者の無言の憤りと反発を詠んだ歌であるが、ここで啄木は手紙にある医者の「あなたの生命（いのち）はたつた一年です」ということばを「生命（いのち）が欲しくないのか」と言い換えているが、いずれにしても啄木は「いのち」ということばに「生命」という字をあてている。当時は和語の「いのち」に対して漢語の「生命」ということばはまだ耳新しかった。

ここで、医者が言っている「いのち」とは、いみじくも啄木が「生命」という字をあてたように、身体的・個体的な生命あるいは生物学的・医学的な生命をさしている。

立川氏はひらがな書きの「いのち」と生命とは意味が異なるというのである。（なお、立川氏の引用では手紙の中の医者の言葉の「生命」に「いのち」のルビが振られているが、『石川啄木全集』ではルビなしである）。

「いのち」と「生命」を使いわけた啄木。それにしても、「いのち」の語の歌は少ない。齋藤茂吉の大正二年出版の『赤光』は「いのち」の語の使用が多い。八三四首中に二十一首ある。表記別に見ると、ひらがな書きの「いのち」が十首、漢字の「命」が十一首である。

赤　光（齋藤茂吉記念館提供）

齋藤茂吉（齋藤茂吉記念館提供）

ながらふる日光のなか一いろに我のいのちのめぐるなりけり

ひとり居て朝の飯食む我が命は短かからむと思ひて飯はむ

一首目は「呉竹の根岸の里」、二首目は「木の実」からである。一首目の「いのち」は春の光と自然とともにある豊かなそれであるのに対し、二首目の「命」は単に寿命であろう。

死なねばならぬ命まもりて看護婦はしろき火かかぐ狂院のよるに

自らのいのち死なんと直いそぐ狂人を守りて火も恋ひねども

「葬り火」の一連に続けておかれている二首である。一首目の「命」が生物的なそれであるのに対し、二首目の「いのち」はそれ以上の意味が加わっているように思う。

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞいそぐなりけれ

「死にたまふ母」の有名なこの一首にはひらがな書きの「いのち」の語の深さと重さがよく感じられる。

では、牧水の場合を見てみよう。明治四十一年七月出版の第一歌集『海の声』には「いのち」の語の使われた歌が三首ある。

山ざくら花のつぼみの花となる間のいのちの恋もせしかな

君よ汝が若き生命は眼をとぢて美しう睡るわが掌に

一首目のひらがな書きの「いのち」の歌は恋の歌で、明治四十年六月発表である。ということは、園田小枝子との五年間におよぶ本格的な恋愛の始まる少し前の作である。小枝子が牧水の下宿を初めて訪ねたのは、大悟法利雄の調査では明治四十年春と推定されているので、彼女への思いをいちはやく歌ったものかも知れない。上の句は初々しく、いずれにしてもまだうぶな感じである。なお、初出の『新声』では次のように発表されている。

山ざくら花のつぼみの花となる間の生命の恋もするかな

歌集『海の声』では「恋もせしかな」と過去形だったが、雑誌では現在形で歌われている。そして、歌集ではひらがな書きの「いのち」が「生命」と表記されている。啄木の「生命」の表記より四年近く早い。そして、啄木の場合、立川昭二氏が指摘していたように、「生命」という文字で生物学的・医学的な「いのち」を指していたとすれば、牧水は「いのち」の語のさらなる強調として「生命」に「いのち」と振り仮名をしているように思える。ただ、歌集収録の際には、この「生命」は個々の生命ではなく、「いのちがけの恋」「いのちにむかふ恋」と言うときのそれなのでひらがな書きにしたのであろうか。

二首目は『海の声』の終り近くにあり、初出は『新声』明治四十一年三月である。「生命」の書き方がされている。「汝」はもちろん小枝子である。この年の新春を小枝子と千葉県の根本海岸で過しており、その直後の作と思われる。「汝が若き生命」とは彼女に対する最高の讃嘆の言葉として発せられている。

死ぬ死なぬおもひ迫る日われと身にはじめて知りしわが命かな

『海の声』のもう一首の作。「病床にて」の詞書のある作であり、生物学的・医学的な「いのち」に近く、したがって「生命」とは書かれていない。

若山牧水

園田小枝子

『海の声』につづく第二歌集『独り歌へる』になると、「いのち」の語を用いた歌が非常に多くなる。明治四十一年四月から翌年七月までの五五一首を収め、明治四十三年一月に出版された。この歌集には「いのち」の語の使われた歌が二十首ある。割合で言うと、三・六パーセントである（『赤光』の場合は二・五パーセント）。まず「自序」が次のような書き出しである。

私は常に思つて居る。人生は旅である。我等は忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ。その間の一歩々々の歩みは実にその時のみの一歩々々で、一度往いては再びかへらない。私は私の歌を以て私の旅のその一歩々々のひゞきであると思ひなして居る、云ひ換へれば私の歌はその時々の私の命の砕片である。

この「自序」の冒頭は先に引いた啄木の「一利己主義者と友人との対話」と共通する。明治四十年代の短歌は、牧水と啄木の「いのち」観によって大きな展開をしたのである。「一度往いては再びかへらない」（牧水）「一生に二度とは帰つて来ないいのちの一秒」（啄木）をいかに生き、いかに歌うか、その思いが生活の実感をふまえて、しかも読者が理解しやすい日本語の表現で行われたことに大きな意義がある。

よるべなき生命（いのち）生命のさびしさの満てる世界にわれも生くなり

恋もしき歌もうたひきよるべなきわが生（い）命（のち）をば欺かむとて

「生命（いのち）」と表記された歌が『独り歌へる』に六首ある。その中の二首である。「よるべなき」とは「自序」に記してあった「忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ」われわれの存在の根本的有りようを言っているはずである。そして、この時期の牧水にとって恋と歌とが「よるべ」になるはずのものだった。もう一首引こう。

よるべなき生命生命が対（むか）ひ居のあはれよるべなき恋に落ちむとす

いや、恋もまた「よるべなき」ものであったというのがこの歌である。

きはみなき生命（いのち）のなかのしばらくのこのさびしさを感謝しまつる

余りいい歌ではないが、こういう作もある。「よるべなき」思い、そしてそこから生まれる「さびしさを感謝しまつる」と。牧水の代表歌となっている「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日（けふ）も旅ゆく」に通じる思いである。というのは、この一首は寂しさのはてる国などなく、むしろ寂しさを味わうことこそ「いのち」を知ることであるとの思いを歌ったものであり、まさに「さびしさを感謝しまつる」心なのである。寂しさを否定的に捉えないで、逆に「いのち」の根源として捉えたところに牧水短歌の大きな特色がある。

『独り歌へる』には「いのち」と表記された歌が十三首ある。「生命」の方がより強調された表現だが、「いのち」も「生命」とほぼ同じ意味で使われている。ただ、「命」と書かれた場合は違う。

あさましく甲斐なく怨み狂へるは命を蛇に吸はるるに似る

『独り歌へる』で「命」と書かれたこの歌は「あさましく甲斐なく怨み狂へる」状態を歌っており、まさに「生命」が失われかけている様が単に「命」と表記されているのである。確かに『独り歌へる』の「自序」の場合には「命」と書かれていたが、それは散文だからである。わずか五句三十一音の短歌では用字にも細心の注意を払わざるを得ない。

先ほど引いた牧水の右の歌の一首に「きはみなき」の語が使われている。この「きは」は「いのち」に懸かる枕詞の「たまきはる」の「きは」と同じ言葉である。中西進氏の同じ本から「たまきはる」の説明を引く。

「きはむ」の「きは」とは極限のことで、極限を求めるのが「きわむ」です。たとえば現代でも「一道を極める」というと、その世界の頂点に達しようとする、という意味になります。そこで、「たまきはる」とは、命が絶えてしまうことなのかというと、そうではないのですね。（中略）『冠辞考』の「ながらふる涯をはるかにかけて」というフレーズからうかがえることは、極限に近づきながらも決して行き着いてしまうことはない、言い換えれば無限の極限に達するという状態、それが「たまきはる」なのだということです。魂が果ててしまうであろう、その極限に向かって、どこまでもどこまでも近づいていくのだけれど、どんなに近づいてもなお、その極限は彼方にある。いうなれば無限大の考え方です。

この中西氏の文を読みながら、『海の声』と『独り歌へる』の次の二首がすぐに私の心に浮かんだ。

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く

わがいのち空にみちゆき傾きぬあなかすかなり遠ほととぎす

一首目は「いのち」の語こそ直接使われていないが、まさに中西氏の言う「たまきはるいのち」の歌であろう。二首目は近づこうとすればするほど遠ざかるものにあくがれる、やはり「たまきはるいのち」の歌であろう。牧水は西洋文明を積極的に導入する当時の日本にあって、日本人の伝統的に持っている「いのち」の豊かさを回復し希求した歌人と言っていいと思う。

『独り歌へる』以後も牧水は「いのち」の語を使い、あるいは「いのち」の語を使わずとも「いのち」の歌を歌い続けた。

晩年の「いのち」の語の使われた代表作を『山桜の歌』から引いておこう。

天地のいみじきながめに逢ふ時しわが持ついのちかなしかりけり

【筆者プロフィール】一九四三年、宮崎市生れ。早稲田大学哲学科卒。「早稲田短歌会」を経て、「心の花」会員。現代歌人協会会員。「現代短歌・南の会」代表。牧水研究家。風土豊かな作品で知られる。歌集『海号の歌』で読売文学賞受賞。『瞑鳥記』『火の橘』等の歌集のほかに、評論、随筆集に『若山牧水・愛と故郷』『あくがれゆく牧水』『青の国から』『命の砕片』等がある。宮崎県立看護大学教授。宮崎県、延岡市、東郷町等が主催する「若山牧水賞」の選考委員。第一回沼津文学祭シンポジウムパネラー、第五十回沼津牧水祭短歌大会講師。

「牧水、あらたな旅立ち」
牧水をテーマに「第一回沼津文学祭」開催

沼津市では平成十五年度に市制八十周年を迎えるのを記念して「第一回沼津文学祭」を開催し、以後、隔年で実施することとなった。沼津文学祭は、作品を募集して賞を授けるというようなことではなく、沼津ゆかりの文人とその作品の顕彰を通じて沼津の文学風土を大切にし、ゆたかな文学資源を活かしたまちづくりを目的とするものである。

第一回の沼津文学祭では、沼津ゆかりの文人のなかから、千本松原をこよなく愛し、沼津を永住の地とした歌人若山牧水（宮崎県東郷町生れ）を取り上げることになった。テーマを「牧水、あらたな旅立ち」とし、牧水を新たな視点で見つめ、牧水の人物像、文学的業績の再認識を通じて、牧水がさらに多くの人々から親しまれ顕彰されるとともに、牧水に象徴される短詩形文学への親しみが市民の間にいっそう広がることを期待して、様々な事業が実施された。

本会としても、牧水をテーマとした文学祭の成功に向けて会員の皆さんに協力を要請し、開催される各事業への参加を呼びかけた。

『新編 みなかみ紀行』（岩波文庫）を編み、牧水研究に新たな光を当てたドイツ文学者の池内紀先生による基調講演「牧水は何を見たか」、歌人の伊藤一彦、小島ゆかり、須永秀生の三氏によるシンポジウム「現代に生きる牧水」、平野啓子氏の朗読パフォーマンスで構成されたメインイベントが、十月十八日（土）に開催された。

池内紀先生による基調講演

本会の『会報』第十六号に玉稿「記録者の目」をお寄せくださった池内先生の説く牧水像に、新たな発見をされた方も多かっただろうし、シンポジウムで、牧水の時代から現代までの短歌について語られるなかから、牧水の短歌史における位置づけについての認識も深まったことと思われる。基調講演、シンポジウムともに密度の濃いすばらしい内容のものであったことが特筆される。

前日の「文学を音で綴る前夜祭コンサート」では、牧水記念館コンサートで沼津へのデビューをし、市内の小中学校で「夢づくり自分探し」に出演中のピアニスト久元祐子さんが、バリトン歌手の北村哲朗さんと共演した。牧水の短歌とシューベルトの歌曲、リストを中心としたプログラムで構成した演奏は、文学祭にふさわしいみごとな演出で好評であった。

十月十九日（日）に文学碑を巡る「ゆったり文学散歩」が開催されたが、これへの参加者が加わった沼津牧水祭碑前祭はにぎわった。

また、「沼津文学アラカルト講座」が市立図書館を会場に四回開催された。第一回の講座で、鈴木邦彦沼津高専教授が「文士たちの沼津―太宰治は沼津で誕生した」と題して文学の大切さを語り、第二回の講座では、成田真洞先生が「書―若山牧水とその周辺」と題し

シンポジウム「現代に生きる牧水」

て牧水の書について詳しく解説をされた。第三回は、明石海人研究家の岡野久代先生が「系譜にみる海人と牧水」と題して、また、第四回は、白秋研究の第一人者である市内在住の歌人玉城徹先生が「文学環境としての伊豆・沼津―牧水・白秋を中心として」と題して、短歌についての深い造詣の一端をお話しくださった。それぞれすばらしい講座だった。

これら主要な事業に加え、夏休みには児童や生徒が短歌や文学に親しむことをねらいとした牧水の「短歌を絵にしよう」の作品募集が行われ、優秀作品二十点が沼津市民文化センターに展示されたが、すばらしい出来栄えに賞賛の声が上がった。その中に、伊藤一彦、小島ゆかり両先生が、「白鳥は・・」の短歌の解釈に一石を投じるものと評したユニークな作品もあったことが注目される。

児童・生徒が、沼津の文学風土について認識を深めることを目的に、夏休みの三日間、市内の文学碑等を案内する「沼津文学ガイドマップ」の制作を行い、秋には印刷されたマップが市内の小学五、六年生、中学生全員に配布された。市では、このマップを観光案内等にも活用したいと考えているという。

「中高生短歌講座」が牧水記念館、桐陽高校、市立第二中学校で開催されたが、講師の須永秀生本会理事は、中高生が日常のなかで感じていることを短歌に詠んで気持ちを伝えることの大切さを語った。中高生それぞれが率直な作品を思い思いに作っていたことが新鮮に感じられた。

本会が毎年、市教委と共催している「中学生短歌コンクール」は、沼津文学祭の一環としても取り扱われ、優秀作品は市内在住の書家成田真洞先生の揮毫により短冊に仕立てられて市民文化センターに展示されたが、短冊に書かれた自分の作品を手にした生徒たちが、これを励みに短歌に興味と関心を高めてほしいと願うものである。

このほか、駿沼学生協が「牧水紹介ノート」を制作し、生徒たちに頒布してくれている。

また、沼津香陵ライオンズクラブが沼津市教育委員会の要請を受けて、牧水ファンにとっての長年の願いであった「香貫山の牧水歌碑」の見晴らしのよい場所への移設を実現してくれたことは、大変うれしいことであった。関係の皆さんのご尽力にあらためて厚く御礼を申し上げる次第である。

さらに、沼津信用金庫が大岡信先生の講演会の開催や連詩の特別展示を行い、明治史料館では「沼津兵学校の文人たち」展や歴史講演会が開催されるなど、第一回沼津文学祭は広がりのある充実した事業であった。

文学を音で綴る前夜祭コンサート

沼津ゆかりの短歌・俳句展

短歌展　平成十五年九月十七日～十月二十六日
俳句展　平成十五年十月二十八日～十二月七日

本会では、九月十七日から十二月七日まで特別企画展「沼津ゆかりの短歌・俳句展」を開催した。以前から地域の短歌をはじめとする短詩形文学を一堂に集めて発表展示する場をもちたいと考えてきたので、沼津市制八十周年を記念して実施された「第一回沼津文学祭」への協賛事業として企画したものである。

会員へ案内するとともに、「広報ぬまづ」や新聞等を通して参加を呼びかけた。短歌に関しては、本会主催の歌会や短歌講座などを通して短歌を詠む人たちとのつながりはあるが、俳句に関してのつながりは薄かったので、結社に呼びかけて、俳句を詠む方たちに参加をお願いした。韻文に親しむ者同士が親しく交流することをも願った。展示する作品は、戦後のものに限ることにして、個人の短歌や俳句ならびに歌集や句集、グループや結社の合同歌集、句集や雑誌とした。

前期の「短歌展」は、大澤敏夫教育委員会文化振興課長、牧水の孫である榎本篁子館長

の列席を得て、牧水の祥月命日である九月十七日に開会した。短冊や色紙に自筆で書かれた短歌が九十四首、歌集一四三冊、合同歌集二十六冊、その他歌誌等が寄せられた。

展示場となったラウンジの壁面中央に牧水と喜志子の比翼の屏風が置かれ、色紙と短冊が壁面に飾られ、歌集等が机上に並んだ展示は、報道機関にも取り上げられ、一、五三五人もの人に見ていただき好評であった。

また、十月二十八日から開かれた後期の「俳句展」は、飾り付けを含め「潮音俳句会」ほか俳句関係の皆さんにご協力をいただいた。一四七句もの短冊が飾られた様は圧巻であった。なお、当地に縁の深い原田濱人、清水杏芽両氏の作品等を特別コーナーに展示した。

「俳句展」の開会式は、長澤靖夫教育長、館長ご夫妻をはじめ、各結社の方々の列席を得て、にぎやかなものになった。テープカット後の中央の大テーブルを囲んでの和やかな交流は意義のあるものだったと思われる。何度か足を運んでくださった方もいて、一、五三七人が来館された。

この「特別企画展」を実施することによって、市制八十周年記念の「第一回沼津文学祭」に文字通り協賛できたことは、本会として大変に喜ばしいことであった。

潮音俳句会の土屋みさ子様が季刊俳誌『潮音』に本企画展のことを書いておられますので、転載させていただきます。

千本松原の一角に建つ記念館で、俳句をテーマにした企画は初めてのことである。沼津ゆかりの、俳句を愛する百五十名近くの作品が一堂に会した。其々の世界をそれぞれの表現で、短冊、色紙、俳画を大いに楽しませてくれた。同時に、香貫山中腹に句碑の建つ、故原田濱人氏の直筆の短冊、句集も展示された。「潮音」と会誌交流のある「みづうみ」の創刊者であり、潮音第四号「沼津句碑散策」でも取り上げている。

会場の中央には、戦後の沼津俳句界の先駆者として五十年間歩いて来られた、故清水杏芽先生の業績を特別展示。一層格調高い催しとなった。〈春雨は松の雫となり匂う〉を含む短冊十二枚、多くの著書等、改めて先生の大きさに触れた一ヵ月間であった。〝沼津といえば短歌〟のイメージは否めない現在の状況。ようやく俳句も市民権を得たように思ったのが正直な気持である。

会期中のラウンジでは、ガラス越しの富士山を正面に句集、俳誌などを繰ったり、談笑したり、ゆったりとした時間を過ごしている多くの方をお見掛けした。十一月二日には、県俳句協会熊谷愛子さんの文化講座も開かれ、好評裡に閉幕となった。千五百人位の入場者だったと聞く。終りに記念館の皆さんに心から感謝申し上げ、歌人牧水の俳句二句を紹介しておきたい。

（歿三日前の作）

つれづれや天井を這ふ百足の子

秋の夜やのそのそとひとの入りて来つ

富士山を望む牧水歌碑めぐり

榎本篁子（沼津市若山牧水記念館館長）

沼津市制八十周年を記念して「牧水、あらたな旅立ち」をテーマに「第一回沼津文学祭」が七月から開催され、十月のメインイベントや四回にわたる文学アラカルト等も終了し、十一月十六日（日）、沼津牧水会主催の「富士山を望む牧水歌碑を巡るバスツアー」が行われた。沼津・三島・裾野には牧水の歌碑、文学碑が八基あるものの、交通が不便ということもあって通して見ることはなかなか容易でなかったのだが、沼津牧水会のお陰で、前回（平成九年五月）の「西伊豆牧水歌碑めぐりの旅」に続いて待望の「富士山を望む牧水歌碑めぐり」が実現した。

前日午後から雨が降り始め、当日心配しながら目覚めると雲が切れていて、定刻の午前九時に牧水記念館を出発する頃にはすっかり晴れ上がって暑いくらいであった。

参加者は三十名。途中乗車の人を拾い、九時三十分三島大社着。

三島大社内の歌碑の前で記念撮影

行程

牧水記念館 ― 三島大社 ― 桜川沿いの文学碑 ― 裾野市佐野の鈴木秋灯宅前 ― 裾野市民文化センター ― 千福中央公園・五竜の滝 ― 恋路亭 ― 須山の清水館 ― 忠ちゃん牧場 ― 富士山資料館 ― 頼朝の井戸 ― 清水町柿田川公園 ― 牧水記念館

三島大社の牧水歌碑

昭和三四年一二月六日、「三島民報」創刊一〇周年を記念して小西政三社長により建立される。文字は牧水の自筆。高さ一・二メートル 巾一メートル。

一家を挙げて沼津在楊原村上香貫へ移住した翌年の大正一〇年、三島大社の夏祭りの花火を門口から眺めて詠んだといわれている。第一四歌集『山桜の歌』（大正一二年五月刊）所収。

大正十年詠、昭和三十四年建立の歌碑

のずゑなる三島のまちのあげ花火月夜のそらに散りて消ゆなり

と、桜川沿いに平成六年に建立された文学碑（大正九年著『箱根と富士』の一節）を見学して、十時十五分バスは一路北へ向かう。

途中、牧水との交流厚き裾野市佐野の鈴木秋灯邸の歌碑は、道路に面し駐車出来ないので、バスの窓からの見学となった。歌は昭和三年六月牧水が秋灯の留守中に訪ねた折の六首で、牧水のペン書きを基にして昭和五十五年四月に秋灯氏が建立した。

十時四十分裾野市民文化センターに到着。芹沢充寛氏をはじめとする「裾野牧水を語る会」の方たちが出迎えてくださる。文化センター内に設けられた「牧水と裾野」の展示室を見学。展示品はすべて鈴木秋灯氏の寄贈によるとのこと。数々の遺品にあの温和な秋灯氏を懐かしむ。

文化センター構内西側の黄瀬川河畔に、富士を背にして建てられた大きな自然石の歌碑の前で記念撮影。

この歌碑は平成三年の建立。大正十一年六月佐野（現裾野駅）から須山村の清水館に泊まり御殿場駅へ出た時の詠

桜川沿いの文学碑

平成六年三月八日、三島ライオンズクラブの建立。署名は牧水の自筆。大正九年一二月一日、三島大社に詣で、東海道を箱根に登っていった折の紀行文「箱根と富士」の一節。随筆集『静かなる旅をゆきつつ』（大正一〇年六月刊）所収。

若山牧水

宿はづれを清らかな川が流れ、
其処の橋から富士がよく見えた。
沼津の自分の家からだと
その前山の愛鷹山が
富士の半ばを隠してゐるが、
三島に来ると愛鷹はずっと左に寄って、
富士のみがおほらかに仰がるるのであった。
克明に晴れた朝空に、
まったく眩いほどにその山の雪が輝いてゐた。

「箱根と富士」（大正九年 作）より

桜川沿いの「三島水辺の文学碑群」のうちの第２号碑

裾野市民文化センターの歌碑

平成三年一〇月一〇日建立。高さ二メートル、幅一・六メートルの自然石。文字は牧水の自筆。裾野市民文化センター敷地内の黄瀬川に面した広々とした眺望のよいところにある。

大正一一年六月に詠んだ歌。『山桜の歌』所収。「大野原の初夏―富士の麓大野原の秋は既に知りぬ、初夏の野原のながめはいかならむとて六月初めまた其処に遊ぶ。」の詞書がある。

なお、初出は、『みなかみ紀行』（大正一三年七月刊）所収の紀行文「大野原の夏草」である。

より来りうすれてきゆるみな月の雲たえ
まなし富士の山べに

そこから芹沢氏は案内役としてバスに同乗してくださり、ほど遠くない千福中央公園の歌碑に十一時十五分到着。

高さ三八〇センチの大きな歌碑で、夫の榎本尚美は計測に苦労していた。昭和五十年建立。沼津へ移った直後の大正九年十月初めて富士裾野を訪ねたときの歌

富士が嶺やすそのに来り仰ぐときいよゝ
親しき山にぞありける

この公園からは五竜の滝が眺められる。牧水は初めて五竜館を訪ねた模様を随筆『野なかの瀧』に書いている。景ケ島での鵜鶘（ぺりかん）・河鹿・魚等のその描写は、池内紀氏が沼津文学祭での基調講演「牧水は何を見たか」で語られた「牧水の記録者の目」そのままであったなどと思いながら、滝や川の流れを見つめた。

「あれは信濃の檀（まゆみ）ではないか？」「否！」など植物談義に花を咲かせたりもし、十二時三十分御殿場や深良用水に通じる農免道路の途中「恋路亭」で天麩羅蕎麦と般若湯の楽しい昼食となった。庭内の川田順の歌碑などを見つつ、十三時三十分清水館に向けて出発。

「裾野牧水を語る会」の皆さんと一緒に記念撮影

牧水が土砂降りの雨の中、泥草鞋の重さに悩まされながら歩いた道を、バスは三十分で到着。清水館庭内の

日をひと日富士をまともに仰ぎ来てこよ
ひを泊る野のなかの村

の歌碑の前で記念撮影。八十三年前に書いた喜志子宛の葉書にある宿であるのだ！と、思い一入であった。この歌碑は昭和五十三年清水館主野田達郎氏によって建立された。今回はからずもご子息芳徳氏にお目にかかることが出来たが、ゆっくりお話をする時間が無く、心を残しつつ、十四時二十分清水館を出発。十四時四十分に「忠ちゃん牧場」に到着。

その時、冬日に輝く大野原の見事な富士が全容を現した。まさに見せてくれたと形容したいほどのタイミングであった。日頃富士に親しんでいる沼津牧水会のメンバーも一様にその大いなる富士に魅せられ声を上げたのだった。此処には川田順の歌碑があるが、父旅人がこの大野原の縁（ゆかり）の地に「なびきよる…」の歌を、牧水の富士代表歌として歌碑に残したいと話していたことを思い出す。

晴れ上がった富士を見ながら、十四時五十五分海抜八八〇メートルの富士山資料館に至り、午後の日に輝く富士を背に、日にかげった

千福中央公園の歌碑

昭和五〇年六月二八日、裾野市の文化協会、ライオンズクラブ、青年会議所によって建立される。千福中央公園近くの五竜の滝は黄瀬川中流の景勝地として知られ、牧水は「五竜館」にも泊っている。

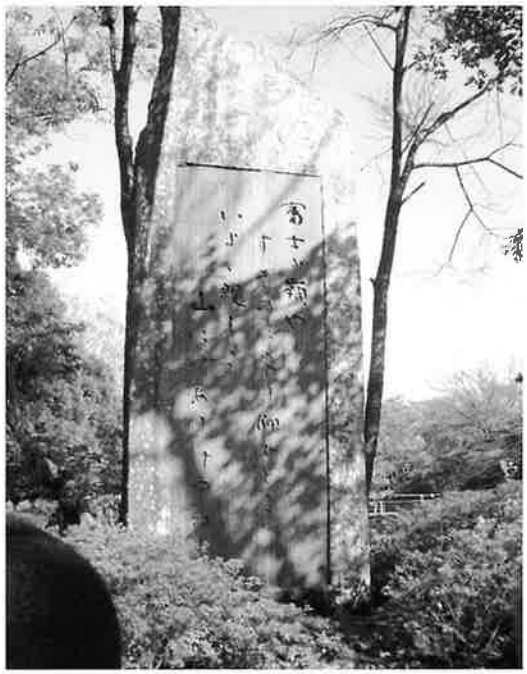
富士が嶺や
すそのに来り仰ぐとき
いよゝ親しき
山にぞありける　牧水

この歌は、沼津に引越して来て間もない大正九年一〇月九日～一一日の「富士裾野の三日」（『静かなる旅をゆきつつ』所収）と題した旅のなかで詠んだもので、『山桜の歌』に所収。

「大野原の秋―富士の南麓にあたる裾野を大野原と呼ぶ、方十里にも及びたらむか、見る限りの大野原なり。」の詞書がある。

また、大正一〇年八月に「佐野瀑園五龍館佐野ホテル」に宿泊したときのことが、「野なかの瀧」（『みなかみ紀行』所収）に書かれている。

なお、翌一一年六月はじめにも富士山の裾野を旅し、「大野原の夏草」（『みなかみ紀行』所収）を書いているが、このときは大正九年の旅と同じ須山の清水館に泊まっている。



歌碑（昭和五十三年建立）を秋草の中に見る。

なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ
富士が嶺のゆふまぐれかな

その後十五時五十分、山毛欅（ぶな）の林の落葉を踏んで頼朝の井戸と水原秋桜子の句碑を見る。

牧水も紀行文に書き、今も続く富士の芒の原の演習場は、思えば頼朝の富士の巻狩りの頃からのものであったことを今更ながら思わされた頼朝の井戸であった。

長泉町のバイパスを経て夕闇迫る清水町の柿田川公園で大悟法利雄の大きな歌碑を見て帰途に着く。

今回、牧水のほか川田順、水原秋桜子、大悟法利雄の歌碑も訪ねたが、それぞれに縁のあるお三方に、時を超えて再び巡り会うような懐かしさを覚えた。

雨という予報もあって防寒の用意で参加した歌碑巡りであったが、三島二十四℃、静岡二十五℃という暑いくらいの日和の中、見事な富士も仰ぐことが出来、晴オトコ氏のおかげや実行委員の方々に感謝しつつ十七時二十五分無事牧水記念館に帰着した。

牧水は、明治三十七年早稲田大学入学直後の五月三日の日記に

暁起窓をくれば、あつぱれ晴れたりな新

清水館の歌碑

日をひと日富士をまともに仰ぎ来てこよひを泊る
野のなかの村　　牧水

昭和五三年一一月三日、野田達郎氏により清水館の庭先に建立された。碑石は根府川石の一面を長方形に削ったもの。達郎氏の伯父が大悟法利雄氏と親友で、歌の選定に一役買ったとのこと。牧水自筆の半切の文字を少し拡大したものが彫られている。

清水館は、繭を商う人たちの宿として繁盛し、牧水は大野原を旅した大正九年一〇月九日と同一一年六月四日の二度泊まっている。現在、旅館は廃業しているが、建物は残っており、当時の様子を偲ぶことができる。

大正一一年六月に詠んだ歌。『山桜の歌』所収。「大野原の初夏―富士の麓大野原の秋は既に知りぬ、初夏の野原のながめいかならむとて六月初めまた其処に遊ぶ。」の詞書がある。

この時、牧水は「真日中の日蔭とぼしき道ばたに流れ澄みたる井手のせせらぎ」をはじめとする「大野原の初夏」二七首を詠んでいる。

緑の天！杳（はるか）に西、富士の神山浮きて見えたり、生れて初めての拝眉を得しなり。立つて見つ、かがんで見つ、果ては窓からで安堵せず道路に出てまで見る。

と初めて富士を見た興奮ぶりを記している。

その牧水が大正九年八月沼津在上香貫に住まいを移して一ヶ月後に初めて詠んだのが、今回の沼津文学祭を機に絶好の場所に移設された「香貫山の歌碑」に刻まれた

香貫山いたゞきに来て吾子とあそびひさしくをれば富士はれにけり

などの一連の歌である。

それからは、どんどん富士に魅せられてゆき、翌十年に生れた次男に「富士人」とまで名付け、のちに牧水の名歌と言われる富士の歌の多くが生れたのである。

この度の裾野の歌碑巡りによって、池内紀氏に「その新鮮さに舌をまいた」と賞讃された牧水の紀行文『富士裾野の三日』や『大野原の夏草』の風情と富士の魅力は、牧水をして沼津を離れられなくせしめた程であったことをこの目で確認することが出来た。

改めて第一回沼津文学祭「牧水、あらたな旅立ち」の悼尾を飾るにふさわしい催しであったと感謝している。

富士山資料館（裾野市十里木）の歌碑

なびき寄る
雲のすがたの
やはらかき
けふ富士が嶺の
ゆふまぐれかな　牧水

昭和五三年一二月二四日建立。高さ約一メートルの自然石。裾野市立富士山資料館館長渡辺徳逸氏は、清水館主野田達郎氏の伯父。「富士山の神様」と言われた人で、大悟法利雄氏と親交が深かったという。

この歌は、大正九年一〇月、大野原から十里木までの最初の旅で詠んだもの。『山桜の歌』所収。

第50回

沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十九日(日) 午前十一時

第五十回の記念すべき沼津牧水祭碑前祭は、気持ちのよい秋晴れの下で催された。

最前列には、斎藤衛市長、鈴木秀郷市議会議長、伊藤正彦文教消防委員長、長澤靖夫教育長、前日の沼津文学祭で基調講演をされた池内紀先生、シンポジウムのパネリスト伊藤一彦先生、宮崎県文化振興課の河野誠氏と牧野敏博氏、延岡市からの若山牧水延岡顕彰会川並俊一会長ご夫妻ほかの皆さま、東京牧水会事務局長の田原大三氏、横須賀市の青木栄治氏、秋田市の渡邊喜一氏、香川県直島町の片岡健夫氏等のご臨席を賜り、盛大な碑前祭となった。

会場に流れる大正琴の演奏（琴城会沼津）が祭りの雰囲気をかもし出す中、定刻の午前十一時、東海庵青龍師による点前と献茶が厳かに行われ、式典は開幕した。林理事長の挨拶、斎藤市長、長澤教育長の祝辞、榎本篁子当館館長の献花・献酒と挨拶があった。

花柳稔氏の舞踊につづいて実施された「中学生短歌コンクール」の特選入賞者の表彰式では、披露される一首一首に感嘆の声が上がり、受賞した中学生たちへのよい励ましになったと思われる。恒例の「牧水のうたを歌う会」の合唱で式典は終了した。

正午、斎藤市長、鈴木市議会議長、池内先生、川並会長、榎本館長によって樽酒の鏡が開かれ、鈴木議長の乾杯の音頭が高々とひびき、「芝酒盛」が始まった。

牧水短歌の詩吟朗詠（岳心流沼津愛吟国風会）、「ようそろ」と「裾野五竜太鼓保存会」の力強い太鼓の響きが流れ、川並氏のお話、延岡市からご夫妻で参加された塩月貞氏の牧水短歌の朗詠も披露された。

女学生の頃、牧水に会って話をしたことがあるという満八十九歳の石井敏子さんが思い出話を語ってくれ、沼津牧水会の歴史の重みをあらためて感じた人も多かったと思う。沼津文学祭の一環として実施された「ゆったり文学散歩」への参加者も徐々に集まり、祭りは賑やかに盛り上がっていった。

おでん、焼き鳥、やきそばのテントにはひっきりなしに人が集まり、野点の茶席も満員、太鼓の方たちの動きも一段と華やかになり、松林を越えて音が響きわたる中、午後二時過ぎに閉会した。

短歌大会

十月五日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館

沼津牧水祭短歌大会は第五十回の記念の年ということで、講師に、宮崎県等が主催する「若山牧水賞」の選者でもある伊藤一彦先生を遠く宮崎市からお招きした。平成十三年に哲西町で行われた「全国牧水サミット」でお会いし、翌年の延岡市での「若山牧水顕彰全国大会」でも親しくお話しさせたご縁で依頼をしたが、快く引き受けてくださった。

午前中は「命の砕片」と題した講演で、牧水の歌をはじめ、西行、啄木、与謝野晶子、上田三四二、佐佐木幸綱、そして御自身の作品を例に引き、「命の歌」について語られた。「命の本質は歌えない。歌は命の砕片でいい」と語り、歌は作り続けることが大事と結ばれた。「寂しさも哀しさも一つの人生。旅をするということは寂しさ哀しさと向き合うこと」という話も印象に残った。

牧水賞（選者賞）第一席

滑走路進む翼に乗っている夕日ころがり
落ちて離陸す　　勝又　召子

同　第二席

共かせぎの母をまちいる学童室子が子を
かばいて日没近し　　坂田　順司

以下選者選の作品

忙しげに移る数字を追う吾もエレベーターに無援のひとり　　勝呂　弘
撒き干しの駿河の海のさくら海老富士青くして沖は凪ぎおり　　秋元　悦子
賜物のつゆの晴れ間を惜しみつつ「十六夜日記」の講座に通ふ　　橋口　みち子
手の窪に囲ふ蛍は光りつつ生命線の上を動かず　　小松　和子
熟れたれば剝き易き桃の皮のように老いは寛容になりゆくらしも　　須永　秀生
乗り越して終着駅に降り立てば中有まようごときたまゆら　　長田　純
春楡の風を聴きにしダグアウト在らねど遇ひたりきみの白髪　　大原　葉子

互選賞第一位　市長賞

この背に揺られ眠りし日もありき傘寿過ぎたる姉の肩揉む　　木村　佳

互選賞第二位　市議会議長賞

共かせぎの母を・・・・　　坂田　順司

互選賞第三位以下第十位まで

ネックレスと好きな指輪で旅に出るしばし母でも祖母でもなけり　　相原　明子
母といま在るしあはせにうなづきて長き廊下を車椅子押す　　岡田　貞義
視力なき子の手に草を差し添へて駒呼ぶ人の声もやさしき　　内倉　就昭
針のなき手もてシーツを縫ふ仕草ひたすら縫ひきベッドの母は　　宮川　良子
あぢさゐの藍を深めて雨にほふS字曲がりの寺の坂道　　深澤　光江
一語一語たしかむるごと聞こえ来る校内放送の少女の声は　　仁科　照
葉書からはみ出すほどに向日葵を描き来ぬ友は息災らしも　　青木　初音

「実感を大切に」「言葉を選んで」という伊藤先生の懇切な批評は説得力に富んでいて、納得させるものだった。（理事　須永秀生）

第16回 雛の歌会

第十六回の雛の歌会は、平成十六年三月六日（土）の午後一時半から、沼津市若山牧水記念館和室で、浜松市から「翔ける」所属の柚木新氏を講師にお迎えして行われた。

今回の投稿数は七十六首、参加者は四十六名。柚木氏の丁寧な批評が好評であった。

柚木氏の選んだ作品と評を紹介する。

乾きたる冬の巷へ着ぶくれてこぼるるようにマンションを出づ　青木　朝子

こぼるるようにと言う具体が作者の悲しみを表現している。

くれなゐの涙溜めたる壷かとも石榴の花は雨後の陽に照る　大塚　八重子

石榴の花をくれないの涙を溜める壷と表現した感性を買う。

「美しくあれ」「賢くあれ」と雛の日に背押されいまに妹と競ひぬ　山本　澄子

背を押されて妹と競う。その生活が未だに続いているという感慨が歌われている。女の情念の世界が描かれていて成功。

しげしげと虫めがねにて落款を見る人まじり列は進めり　増井　春江

展覧会だろう。丁寧に作品を鑑賞している人に感心しながらその列にいる。歌にならないところを歌にしたところを買う。

顎鬚に茶髪とがらす若き技師ＭＲＩがわが脳刻む　勝又　召子

ＭＲＩ操作技師の顎鬚に茶髪という現代的な青年に対する微妙な心理が描かれている。

その他、柚木氏が取り上げた作品と短評

さばさばと自が手術日を告げて来し母が電話に雪降ると言ふ　小林　敦子

「さばさばと」の主観が読者が作品の世界に入っていくのを邪魔をしている。下句は淡々と述べて簡潔な趣を構成した。

遠景としてビル高し横丁にひとは暮らしのものを商ふ　小林　暁子

「遠景としてビル高し」で地方の町に住むことを表わしているのだろうが、やや観念的ではないだろうか。下句は確実に表現しようという姿勢が表れている。

短歌は理屈ではないこと。感性を磨いて単純化に心がけたいという方向からの指摘が多かったように思った。（理事　須永秀生）

文　化　講　座

企画展「沼津ゆかりの短歌・俳句展」の一環としての講演会

「戦後の短歌と地域の短歌の歩み」

日　時　平成15年10月12日(日)
講　師　曽根耕一氏

手作りの比較年表を横軸に、各歌人の歌を縦軸にして、戦中から戦後の短歌について話された。身近な沼津の歌詠みたちのことはとくに興味深く、懐かしそうにする顔が多く見られた。

「俳句　あれこれ」

日　時　平成15年11月2日(日)
講　師　熊谷愛子氏

ご自身の俳句歴、俳句への思い、俳句の見方、作り方等親しみやすい話し方で、会場を和ませてくださった。吟行での歩き方、見方など、句人をうなずかせる話もあり、好評を得た。

初心者のための短歌講座
牧水記念館短歌会

日　時　平成15年4月～平成16年3月
　　毎月第2土曜日　午前・午後
講　師　須永秀生氏

「家紋の魅力」

日　時　平成15年9月6日(土)
講　師　八十濱俊一氏

好評だった昨年の講座のアンコールに応えての「家紋」についてのお話である。

いろいろな家紋の基本の形、模様、そのきまりや美しさについて、豊富な資料を示しながら、各家紋のエピソードも加え話された。家紋の魅力を十分に楽しませてもらえた2時間であった。

サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

第１回　『若い芽の演奏家たち』

日　時：平成15年 7月19日(土)　午後７時
出　演：鈴木江美（ピアノ）、鈴木紀子（ヴァイオリン）
　　芹沢倫子（ピアノ）、薬袋怜子（マリンバ）
　　高田香織（ソプラノ）、旭　智子（ピアノ伴奏）
来場者：104人

第２回　古楽コンサートシリーズ 12
『古楽器による弦楽アンサンブル』

日　時：平成15年 9月 5日(金)　午後６時45分
出　演：渡邊慶子、丹沢広樹、宮崎容子
　　（バロック・ヴァイオリン）
　　木村理恵（バロック・ヴィオラ）
　　吉濱綾伽（バロック・チェロ）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：146人

第３回　『夢鳴群男性コーラス』

日　時：平成15年11月22日(土)　午後６時30分
会　場：沼津市千本プラザ 音楽ホール「松籟」
出　演：夢鳴群（コーラス）、小林陽子（指揮）
　　鈴木江美、芹沢倫子（ピアノ伴奏）
　　川島祐子（フルート）、鈴木輝男（ギター）
来場者：168人

第４回　古楽コンサートシリーズ 13
『ギターとチェンバロの夕べ』

日　時：平成16年1月17日(土)　午後６時45分
出　演：岩永善信（ギター）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：112人

平成15年度事業報告

総　会（第17回）　平成15年 5月16日㈮ 午後6時～7時
理事会　第1回（通算91回）平成15年 4月15日㈫ 午後6時～7時30分
　　第2回（通算92回）平成15年 5月16日㈮ 午後4時～5時
　　第3回（通算93回）平成15年 8月22日㈮ 午後6時～7時
　　第4回（通算94回）平成15年12月 9日㈫ 午後6時～7時30分
　　第5回（通算95回）平成16年 3月 4日㈭ 午後6時～7時30分

会報発行
　第16号発行　平成15年5月20日
館報発行
　第31号発行　平成15年9月25日
　第32号発行　平成16年3月10日

1　調査研究事業
（1）第4回「百草園牧水碑前祭」（東京牧水会主催）
　日　時：平成15年 8月24日㈰
　会　場：東京都日野市百草園　牧水歌碑前　祝電打電
（2）第53回「牧水祭」（宮崎県東郷町主催）
　日　時：平成15年 9月17日㈬
　会　場：牧水記念館裏牧水歌碑前及び牧水公園ふるさとの家
　　祝電打電
（3）香貫山牧水歌碑移設式
　日　時：平成15年 9月17日㈬
　会　場：沼津市内香貫山香陵台　牧水歌碑前
　参加者：榎本館長夫妻、林理事長、青木、浅井、四方の
　　各理事、三宅芳則会員
（4）沼津市制80周年記念
　第1回沼津文学祭「牧水、あらたな旅立ち」に協賛
（沼津市、沼津市教育委員会、沼津文学祭開催実行委員会 主催）
◇文学を音で綴る前夜祭（CONCERT）
　日　時：平成15年10月17日㈮ 午後7時～9時
　会　場：沼津市民文化センター　小ホール
　出　演：久元祐子（ピアノ）北村哲朗（バリトン）
◇基調講演、シンポジウム、朗読パフォーマンス
　日　時：平成15年10月18日㈯ 午後1時～5時
　会　場：沼津市民文化センター　小ホール
　基調講演「牧水は何を見たか」池内 紀氏
　シンポジウム「現代に生きる牧水」
　　伊藤一彦、小島ゆかり、須永秀生の各氏
　朗読パフォーマンス　平野啓子氏
◇文学アラカルト講座
　会　場：沼津市立図書館 視聴覚ホール 各午後7時～9時
　第1回　平成15年10月 3日㈮ 鈴木邦彦氏
　　「文士たちの沼津－太宰治は沼津で誕生した」
　第2回　平成15年10月22日㈬ 成田真洞氏
　　「書－若山牧水とその周辺」
　第3回　平成15年10月29日㈬ 岡野久代氏
　　「系譜に見る海人と牧水－歌集『白描』を中心に」
　第4回　平成15年11月 6日㈭ 玉城　徹氏
　　「文学環境としての伊豆・沼津－牧水・白秋を中心として」
◇中学、高校生を対象とした短歌講座
　講師：須永秀生理事
　第1回　平成15年 8月 5日㈫会場：沼津市若山牧水記念館
　第2回　平成15年11月 4日㈫会場：桐陽高等学校
　第3回　平成15年12月 5日㈮会場：沼津市立第二中学校
（5）「富士山を望む牧水歌碑」を巡るバスツアー
　日　時：平成15年11月16日㈰
　場　所：富士山を望む牧水歌碑（三島大社、桜川沿い遊歩
　　道、裾野市民文化センター、千福中央公園、須山
　　清水館、十里木富士山資料館、柿田川湧水公園）
　参加者：30名
（6）第8回若山牧水賞授賞式
　日　時：平成16年 2月 5日㈭～2月 6日㈮
　会　場：宮崎市 宮崎観光ホテル
　　（受賞者記念講演会：延岡市野口記念館）
　受賞者：栗木京子氏「夏のうしろ」
　参加者：林 茂樹理事長

2　第50回沼津牧水祭の運営
（1）短歌大会
　日　時：平成15年10月 5日㈰ 午前10時30分～午後4時
　会　場：沼津市立図書館　視聴覚ホール
　講　師：伊藤一彦氏（若山牧水賞選考委員、NHK歌壇選者）
　応　募：213首
　参加者：127人
（2）碑前祭・芝酒盛
　日　時：平成15年10月19日㈰ 午前11時～午後2時
　会　場：千本浜公園　牧水歌碑前
　参加者：約 600人

3　文学講演講座の開催等
（1）講演会
「家紋の魅力」
　日　時：平成15年 9月 6日㈯ 午後1時30分～午後3時
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：八十濱俊一氏　　参加者：43人
「戦後の短歌と地域の短歌の歩み」
　日　時：平成15年10月12日㈰ 午後1時30分～午後3時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：曽根耕一氏　　参加者：22人
「俳句 あれこれ」
　日　時：平成15年11月 2日㈰ 午後1時30分～午後3時30分
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：熊谷愛子氏　　参加者：45人
（2）第16回「雛の歌会」
　日　時：平成15年 3月6日㈯ 午後1時30分～午後3時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：柚木新氏（「翔ける」）
　応　募：76首　　参加者：46人
（3）初心者のための短歌講座
　日　時：平成15年4月～平成16年3月 毎月第2土曜日 午前10時～12時
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：須永秀生理事　　参加者：延べ 228人
（4）牧水記念館短歌会
　日　時：平成15年4月～平成16年3月 毎月第2土曜日 午後1時30分～4時
　会　場：沼津市若山牧水記念館会議室
　講　師：須永秀生理事　　参加者：延べ 130人
（5）第14回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
　募　集：平成15年 5月28日㈫～9月10日㈬
　応　募：1,329 首（14校 1,329人）
　入　選：49首（49人）
　選　者：青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、
　　曽根耕一の各理事
　表　彰：平成15年10月19日㈰ 沼津牧水祭碑前祭にて
4　特別企画展「沼津ゆかりの短歌・俳句展」
　　（第1回沼津文学祭協賛事業）
　開　催：前期（短歌展）平成15年 9月17日㈬～10月26日㈰（開催日数 35日）
　　後期（俳句展）平成15年10月28日㈫～12月 7日㈰（開催日数 36日）
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　来場者：前期 1,535人 後期 1,537人 合計 3,072人
5　その他の事業
音楽イベント
　第1回『若い芽の演奏家たち』
　日　時：平成15年 7月19日㈯ 午後7時
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：鈴木江美（ピアノ）、鈴木紀子（ヴァイオリン）、芹沢倫子（ピアノ）
　　薬袋怜子（マリンバ）、高田香織（ソプラノ）、旭 智子（ピアノ伴奏）
　来場者：104人
　第2回　古楽コンサートシリーズ12『古楽器による弦楽アンサンブル』
　日　時：平成15年 9月 5日㈮ 午後6時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：渡邊慶子、丹沢広樹、宮崎容子（バロック・ヴァイオリン）
　　木村理恵（バロック・ヴィオラ）、吉濱綾伽（バロック・チェロ）
　　杉山佳代（チェンバロ）
　来場者：146人
　第3回『夢鳴群男性コーラス』
　日　時：平成15年11月22日㈯ 午後6時30分
　会　場：沼津市千本プラザ 音楽ホール「松籟」
　出　演：夢鳴群（コーラス）、小林陽子（指揮）、鈴木江美、芹沢倫子
　　（ピアノ伴奏）川島祐子（フルート）、鈴木輝男（ギター）
　来場者：168人
　第4回　古楽コンサートシリーズ13『ギターとチェンバロの夕べ』
　日　時：平成16年1月17日㈯ 午後6時45分
　会　場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
　出　演：岩永善信（ギター）、杉山佳代（チェンバロ）
　来場者：112人

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条　この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条　この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究
(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
(3) 文学講演会及び文学講座の開催
(4) 文学に関する各種出版物の刊行
(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条　この法人の会員は、次のとおりとする。

(1) 正会員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
(2) 賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は法人
(3) 名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条　会員になろうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条　この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員　一〇、〇〇〇円
(2) 賛助会員　三〇、〇〇〇円以上

2　この法人の会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員　年額　五、〇〇〇円
(2) 賛助会員　年額　一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉林　茂樹
〈副理事長〉杉山　光男　河本與司幸
〈理事〉浅井　治　保坂　輝夫　田中　和男　川口　和子　須永　英男
金子　安夫　四方　一弥　八十濱俊一　杉山　芳春　長澤　靖夫
〈監事〉杉山　重義　鈴木　弘行
〈事務局〉真木美紗子　大島　葉子　西川　滋子　増田　恵子　伊藤早智子

編集後記

平成十五年度は、沼津市制八十周年の記念の年で、本会にとっては「沼津牧水祭」が五十回目を迎える節目の年でした。沼津市が市制八十周年を記念して実施した第一回沼津文学祭に、本会も全面的に協力するとともに、協賛事業としての企画展「沼津ゆかりの短歌・俳句展」を開催いたしました。会員の皆さまから多大なご支援をいただきありがとうございました。おかげさまで企画展にも大勢の方がおいでくださり、大変盛会でした。

沼津文学祭のシンポジウムのパネラーで、沼津牧水祭・短歌大会の講師をしていただいた伊藤一彦先生が、牧水への深く熱い思いを綴った玉稿をお寄せくださいました。「いのち」という一つの「言葉」からたくさんのことに目を向けさせていただきました。「牧水」をきちんと読まなければと改めて思いました。

十一月に行った『富士山を望む牧水歌碑を巡るバスツアー』に参加された榎本篁子当館館長から一文をいただきました。楽しかった晩秋の一日が思い出されます。

平成十五年度も入館者が一万人を超えることができました。「牧水、あらたな旅立ち」をテーマとした第一回沼津文学祭の開催を機に、更に多くの方々にご来館いただけるよう努めてまいる所存です。

■会報「幾山河」第17号　■平成16年5月20日発行　■編集・発行　社団法人　沼津牧水会　■〒410-0849　沼津市千本郷林1907-11
TEL・FAX〈055〉962-0424　E-mail：bokusui@thn.ne.jp　URL：http://web.thn.jp/bokusui/　■印刷　㈱耕文社